

ヴァナキュラー文化としての「赤ずきん」

——少女と暴力の物語

ウェルズ恵子

はじめに

Vernacular Culture について

赤ずきんの物語は、複数分野からの研究が多い特別なおとぎ話です。それを踏まえて、私は、赤ずきんの話を「ヴァナキュラー文化」(Vernacular Culture) のひとつとして分析してみたいと思います。そこで、まずは「ヴァナキュラー文化」とはどんなものかということですが、「ヴァナキュラー」というのは、日常性や地域性に根ざしたもの、または何らかの集団に属する人々の文化につける形容詞です。例えば、一般大衆がどのようなことをして生きていたかを通時的に明らかにして記録したのはヴァナキュラーな歴史で、政治に関する「歴史」と区別されます。それを「文化史」と呼ぶこともあります。日常生活の中で権威のない立場の人々がより良いものを目指して自発的に磨きをかけた文化がヴァナキュラー文化です。生き生きと使われている言語や習慣や物などの、平凡で当たり前の現象がこれにあたります。ヴァナキュラーな文化は、政府の保護を受けたりメディア発信の主流となったりしているオーセンティックな文化と対照されることもあります。

では、いわゆる「文学」Literature と「ヴァナキュラー文学」Vernacular Literature をどう分けるかということ、こうなります。文字で書き記した文書を一般的にリテラチャーと英語ではいいますが、そのうち娯楽性や表現様式を意識した言語文化芸術が、図書館の分類でいう狭い意味での「文学」です。一方、一般大衆が言葉を使って楽しんだり表現を磨いたりした芸術は「ヴァナキュラー文学」です。これは、なんらかの共通性をもつ複数の人々が創作に関わっているという点では大衆的な文化である一方、いわゆる「大衆文学」(Popular Literature) は、読者層が大衆であるということが観点になるので、ヴァナキュラー文学とは異なります。ヴァナキュラー文化では、創作者も享受者もプロでない人々、嗜好を共にする多くの人々だということが特長です。

ヴァナキュラー文学では、文字より声による芸術性・娯楽性の部分が圧倒的に豊かなので、英語ではこれを Oral Literature とか Oral Tradition と呼ぶこともあります。ただ、先ほど述べたように、Literature とは、「文書」という意味ですから、Oral (口頭の) Literature (文字になった書類) では矛盾するので、英語の場合は Oral Tradition (口頭伝統、口頭伝承) を主に使います。しかし、日本語の「伝統」や「伝承」は、現在も活発に生成を続けているものについてあまり使わないため、私は「声の文化」や「口頭文学」、「口頭文化」¹⁾ と呼ぶのがいいと思っています。ヴァナキュラー文化の特質は、生きて動き続けている、変化が続いているというところにあるからです。現代文化においては、インターネット上で交わされる絵文字や一般の人がやりとりして芸術性を高めていくビデオクリップなどの視覚文化情報をヴァナキュラー文学の一部とし

てみるすることができます。なぜかといえば、これらの文化現象は、喋ったり会話したり語りかけたり歌ったりという、声をベースにした楽しみやコミュニケーションの営みに、その芸術性の源をおいているからです。そう考えたとき、声の文化・ヴァナキュラー文学は、文字文化に勝るとも劣らず現代において優勢な文化といえます。それに、声の文化は、実は人類の歴史においてずっと重要でした。特に印刷技術が発達する前の時代やそれ以後でも、教育が受けられない貧しい人々の間では、彼らの幸福感を左右するほど欠かすことのできない言語文化なのです。

「赤ずきん」は口承と文字のブレンド作品

「赤ずきん」は、もとは、文字を使わない民衆が語り伝えた民話です。タイトルさえなかったお話が、17世紀以降文字文学として作り直されました。私たちが一般的に知っている赤ずきんの話は、口頭伝承が文字文学として発表され広まったものです。作者はフランスのシャルル・ペロー（Charles Perrault, 1628-1703）で、17世紀末に宮廷サロンの女性達を読者として書いています。赤ずきんを主人公の少女に着せたのはペローです。（ちなみに、シンデレラのガラスの靴もペローの創作です。）そして19世紀初頭にグリム兄弟が、ドイツでよく知られていた七匹の子ヤギの話と赤ずきんの話に合わせて伝承されてきたらしい物語を、出版しました。日本で最もよく知られているのは、グリムのバージョンだと思います。こうした背景から、本稿では次の順番で「赤ずきん」を説明していくことにします。(1) 私たちが知っているお話を確認します。(2) 「赤ずきん」の原話と考えられている民話をひとつ紹介します。民話は語り伝えなためバリエーションがとて多く、類話はひとつではないのですが、これまでの研究によって赤ずきんの話として知られているのは「おばあさんの話」です。(3) そして、現在「赤ずきん」がどう作り直され、新たに变身、再生し続けているかということ述べます。(4) 最後に、「赤ずきん」の研究史をごく簡単に概観し、この物語に限って実に多くの研究がなされてきたことに対する私の考えを、ヴァナキュラー文化という観点からまとめて、結論にします。

(1) 活字で流布した話

現在よく知られている「赤ずきん」には、前述したように二種類あって、17世紀末にフランス語で書かれて有名になったシャルル・ペローの物語と、19世紀はじめにドイツ語で書かれたグリム童話です。ペローもグリムも口承の物語を語り手から聞き取り、執筆の目的に合わせて自分なりの書き換えをして出版しました。ところがこれらの話はとても面白かったので、人々が口伝えするようになり、さらに類話が生まれました。ペローは物語の少女に赤いものを頭にかぶせるという文学的工夫を加えました。ペローの話を覚えたフランス人のプロテスタント（新教徒）が、17世紀末にルイ14世の迫害にあつてドイツへ亡命し、そこで話を伝えたのだということ²⁾。そうしてドイツ人に伝わったペロー版の「赤ずきん」が、ドイツの民話と合流してグリムが記したような話になりました。そしてまた、オランダの民話研究者テオ・メダー（Theo Meder）によれば、オランダの口承民話にはグリム童話の強い影響が見られるといいます。人々は、それをオランダの話として語り伝えているそうです³⁾。活字で流布した話がヴァナキュラー化していく様子がよくわかるエピソードです。

シャルル・ペローの「赤ずきん」物語



(ペローの『物語集』の挿絵)

ではまず、シャルル・ペローの「かわいい赤ずきんちゃん」⁴⁾ (“Petit Chaperon rouge,” 1697)⁵⁾ を紹介します。

昔、とてもかわいい女の子がいて、おばあさんが赤いずきんを作ってくれました。ペローが「ずきん」というのは、私たちが知っているスウェッツのフードや戦争中の防災頭巾とは違い、貴族階級の女の子がかぶった大げさな帽子のようなものだったそうです。ですから、ずきんをかぶっているということで、彼女は卑賤の出ではないということがわかります。彼女はそれがよく似合い、いつもかぶっていたのでこの子は「赤ずきんちゃん」と呼ばれるようになりました。

ある日、母親がビスケットとバターを持たせて赤ずきんちゃんを祖母の見舞いに行かせます。途中で狼に話しかけられ、彼女は行き先を教えてしまう。狼は近道をしておばあさんの家へ急ぎ、少女は遠回りの道で木の実を集めたり蝶を追ったり花を摘んだりしながら歩いていきます。

狼は、もくろみ通りおばあさんの家に先に着き、赤ずきんちゃんを装って家に入ると、おばあさんを貪り食ってしまいます。それから赤ずきんちゃんが来て、狼はおばあさんのふりをしてベッドに入ったまま彼女を家に招き入れます。そしてベッドで一緒に休むように誘います。

赤ずきんちゃんは服を脱いでおばあさんの布団に入り、おばあさんの腕や足や耳が異常に大きいのに気づきます。ここで例の会話があるわけですが、「歯が大きいのね」と言ったとき、狼は「お前を食べやすいようにさ」と言い、すぐさま彼女を食べてしまいます。

ペローのお話は、赤ずきんが食べられて終わりです。ただ、そのあとに教訓がついています。

<教訓>

かわいく育ちのよい若い娘は、知らない人と話をしてはいけない。そうしないと、狼に食べられてしまう。愛想よくおとなしそうな振りをして、サロンけいぼう閨房まで入ってくるような

狼がもっとも危険だ。

ということで、この「狼」は、貴族階級の男性の比喩であるということがわかります。つまりペローの話は、若い女性を教育するための寓話という形式をとっています。

グリム兄弟の「赤帽子ちゃん」物語

次は、ヤーコプ、ヴィルヘルム・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863; Wilhelm Grimm, 1786-1859) 兄弟が出版した「かわいい赤帽子ちゃん」⁶⁾ (“Rothkäppchen,” 1812)⁷⁾ です。

昔、とてもかわいい女の子がいて、おばあさんが小さな赤いベルベットの帽子を作ってくれた。こちらの帽子は、ちょこんと頭にのる小さな女の子用の帽子です。「女の子」を示す記号とも読めます。ベルベット製ですから、やはりこの子も貧しい家庭の子ではありません。彼女はその帽子がとてもよく似合い、いつもかぶっていたので「赤帽子ちゃん」と呼ばれるようになりました。

ある日、母親が少女にケーキとワインを持たせ、祖母の見舞いに行かせることにします。母親は赤帽子ちゃんに、道草を食わずにまっすぐ行くよう言い聞かせて家から出します。道中の森で赤帽子ちゃんは狼に出会い、怖がりもせず会話をします。お使いの理由と行き先を狼に教えて、狼は、森に咲く花がきれいだよとか小鳥の声がするよとか言って、彼女が森で道草を食うように仕向けました。

赤帽子ちゃんが森で楽しんでるすきに、狼はおばあさんの家へ行き、おばあさんを飲み込んでしまいます。おばあさんの服を着てナイトキャップをかぶりベッドに横になります。この辺はグリム版のユーモラスな場面です。そこへ少女が来て、ベッドのおばあさんのところへ行きます。グリム童話では、赤ずきんはおばあさんのベッドには入りません。ただ、おばあさんの様子がいつもと違うので、耳や目や手が大きいと言います。「お口が大きいのね」と言ったとたん、狼は「お前をよく食べられるようにさ」と答えて彼女を飲み込んでしまった。このくだりは話を聞いている人がドキドキするところで、ペローのバージョンとも変わりありません。

「あら、おばあさんの耳、こんなに大きい」

「お前の声が、よく聞こえるようにさ」

「あら、おばあさんの目、こんなに大きい」

「お前が、よく見えるようにさ」

「あら、おばあさんの手、こんなに大きい」

「お前を、しっかり抱きしめるためにさ」

「あら、おばあさんの口、こんなに大きい」

「お前を、パクッと食べるためにさ」⁸⁾

しかし、グリム童話にはまだだいたい続きがあります。満腹になった狼はベッドに戻って、いびきをかいて眠ってしまう。そこへ木こりが通りかかり、大きないびきを不審に思って家に入り、狼を見つけました。狼の腹を切り裂くと、赤帽子ちゃんとおばあさんが出てきます。三人は赤

帽子ちゃんが持ってきた石を狼の腹に詰めました。狼は目を覚まして逃げようとしたが、石が重すぎて倒れて死んでしまいます。三人は喜びます。赤帽子ちゃんは、これからはお母さんの言いつけを絶対を守ろうと思った、というところで終わりになります。

1857年版のグリム童話では、この話に後日談がついています。別な日に、赤帽子ちゃんがおばあさんのところへお使いに行くことになって、また狼に話しかけられたけれども、今度は用心してまっすぐおばあさんの家へ行き、後からつけて来た狼をソーセージの匂いのする水へ誘い込んで石の水槽で溺れ死にさせた、というものです。これは、少女がいい子になった確認と「三匹の子豚」に通じる別の類話との合体でしょう。

ペロー版とグリム版の比較

活字になってから多くの読者=聞き手を得た、ペローとグリムの2つの話に共通するところをまとめると、次の五つです。

1. 少女はともに赤い被り物を身につけている。
2. 少女を森に送り出すのは母親である。
3. 森に住んでいるのは少女の祖母である。
4. 森(危険な場所)で狼に話しかけられ会話する。
5. 狼に食べられてしまう。

違うところは、四つあります。

1. おばあさんへのお土産が、ペロー版では食事用のビスケットとバター、グリム版ではケーキとワイン。
2. ペロー版では狼に誘われて少女はベッドに入るが、グリム版では入らない。
3. ペロー版では少女は食べられて終わりだが、グリム版では木こりが少女とおばあさんを助ける。
4. ペロー版では少女が母の言いつけを聞かなかった罰を受けるが、グリム版では狼が悪さをした罰を受けて死ぬ。

では次項で、この比較を念頭に口承民話を分析してみます。

(2) 口承の話

口承で知られていた話はどんなふうだったのか。ペロー版ともグリム版ともだいぶ違うので、読者は驚くでしょう。

1. 少女は赤い被り物を身に付けていない。
2. 狼は動物ではなく、人狼(オオカミ人間)として聞き手に共通の理解があった。というこ

とは、ファンタジーではなく相当の現実味を持って話が伝承されていた。

3. 少女は、狼に促されてまず食事をする。
4. 少女は狼には食べられないで、自力で逃げる。

民話版の物語は、フランス語で「おばあさんの話」(“Conte de la mère-grand”) ⁹⁾ というタイトルがついています。これは、おばあさんがしてくれた話ということで、タイトルというほどのこともありません。この話は、ポール・ドゥラリュ (Paul Delarue, 1889-1956) が1951年に伝承民話として報告したものです。

*

あるとき少女の母が、パンと牛乳を持たせて娘を祖母の家へと使いに出します。途上、少女はブズー (狼人間) に出会います。どこへ行くのかとたずねられ、さらに「縫い針の道」を通るのか「留め針の道」を通るのかと聞かれます。少女が「縫い針の道」を行くと答えると、ブズーは、では自分は「留め針の道」から行こうと言います。留め針は安全ピンみたいなもので、ただ刺して布をつけておくだけですから使うのは簡単ですが、縫い針を使うには裁縫の技術がいります。だから、縫い針の道を少女が選んだのは裁縫ができる方へ行くわけで、子どもから大人の女になる途上だという意味だと思われまふ。少女は「縫い針の道」で縫い針を拾って楽しみながら歩いていきます。口承の話は、こんなふうに、比喩的でありながらも同時に現実的です。

さて一方、ブズーは先におばあさんの家に着き、おばあさんを殺します。そして、急に話がグロテスクになりますが、おばあさんの肉を食品室にしまい、血をビンに入れて棚に置きます。少女が家に着くと、ブズーはおばあさんを装って少女を家に招き入れ、食品室の肉とビンの「ワイン」(おばあさんの血) を飲むように少女に勧めます。彼女が食べていると猫がやってきて言います。「こいつ、あばずれだな。自分のおばあちゃんの肉を食べ血を飲むなんて!」

魔女の使いを思わせる猫のひと言で少女は自分のしたことを知るかと思えば、そうではなくて、話そのまま平然と続きます。そういうところが実に面白くて、民話の語り手たちの間では人肉を食べるとか、血を飲むとかいうことが、異常なことではあっても全くの非現実やグロテスク・ファンタジーではなかったとわかります。いくらかは現実味を帯びた事件だったのでしょう。

つぎのくだりも、暗くてエロチックな緊張感をもったエピソードです。ブズーは少女に、服を脱いで自分の隣で休むように促します。少女は「エプロンはどこに置けばいいの」と聞き、ブズーは「火にくべてしまいな。もういらないんだから」と返事します。それから少女は、「ベチコートはどうするの」と聞いて、また「火にくべてしまいな。もういらないんだから」と返されます。

民話のお決まりで、次々他の衣類をどうしたらいいか少女は繰り返したずね、ブズーはいちいち燃やしてしまうようにと答えます。このくだりは、話を聞いているおとなにはまるでストリップショーの物語版で面白かったのでしょうし、子どもは「全部脱いだら食べられちゃう」と思っただけでしょう。人狼は、人間の衣類をかぶせられると狼としての凶暴な力を失うという伝承があります。女の子がブズーのいいなりになって衣類を燃やしてしまうのは、人狼を退治する武器(衣類)を全部捨ててしまうわけですから、彼女の未熟さや愚かさが露見している行為です。

さて、少女はとうとうブズの寝床にはいり、ここでブズの正体が明かされる例の会話となります。ところがここが、民話版では実にユーモラスなのです。こんなふうです。

「おばあちゃん、毛深いね。」
「この方が暖かいんだよ。」
「おばあちゃん、爪がずいぶん長いね。」
「身体がよく搔けるからね。」
「おばあちゃん、すごい肩が強そうだね。」
「それで森から薪をしっかりと運べるのさ。」
「おばあちゃん、耳が大きすぎるよ。」
「お前の声がよく聞こえるじゃないか。」
「おばあちゃん、ものすごくお口が大きいね。」
「お前を食べやすいようにさ。」

ペロー版やグリム版だと、物語の面白いところはこの会話で終わってしまうのですが、民話版はここからが冒険譚で、別の話と後から合体したとも考えられます。おばあさんの血や肉を供するほど気味悪いブズが、このあとすっかり間抜けになるのです。

あの会話で危険を察知した少女は、すぐに「おばあちゃん、外へ出ておしっこがしたい」と言います。昔の農家では屋内にお便所がないから、外へ行くか尿瓶を使って用を足しました。ブズは彼女に「ベッドの中でしなさいよ」と勧めますが少女は外へ出たがったので、ブズは彼女を自分と毛糸で繋いで外へ出します。ここは、毛糸でなくておばあさんの小腸を使ったというバージョンもあり、気持ちの悪い話ですね。

いずれにしろ彼女はブズと紐でつながったまま外へ出るのですが、自分の身体からその紐をほどいてスモモの木に縛りつけ、逃げてしまいます。紐を引いてみると手応えがあるのに少女がなかなか戻ってこないで、ブズは「おまえ、大の方してんのかい」と声をかけます。すると返事がない。あわてて外に出てみると、少女は逃げてもういませんでした。ブズはすぐに追いかけますが、あわやというところで少女は自分の家に入って無事だった、と話が終わります。

民話のバージョンでは、少女の動きが活発で実に面白いです。話の細部にはリアリティがあるし、主人公の少女は生き生きとして、物語の中で幼児性を脱皮します。人狼伝承や人食や猫と魔女に関する迷信が、お話の中に生きています。非日常的な場所(森)では知らない人の口車に乗りやすいことや、いざという時は知恵を使って逃げるべきことなど、子どもたちへの教訓も確かに含まれています。同時に、大人がたのしめる側面もふんだんにあります。これに対して、ペローやグリムが活字で記録した話は、人間を食べるという生々しい暴力の現実や、男性が彼なりの手順を踏んで少女を誘惑するというような文化的に回収されたセクシュアリティの場面など、民話では大事な部分を欠いています。

18世紀から19世紀に隆興したブルジョワジー文化において、生々しい暴力や性に関する情報

は意識的に隠す方向がとられました。ところが20世紀になってジャーナリズムが発展すると、暴力的な現実を隠そうとすることの偽善性が指摘されます。情報の自由が唱えられる一方で、情報から子供を保護するという考えから子供には性や暴力を隠したので、すくなくとも知識人の間では、文芸民話は子ども用のお話と相場が決まりました。グリム兄弟が彼らの民話集を「子どもと家庭のためのお話」という題にしたのがこうした流れの象徴的な出来事で、グリムは版を重ねるに従って当時の子ども観や教育観に合うよう物語を修正しています。とはいえ、現代になるとイギリスの作家アンジェラ・カーターのように、口承民話の優位性をみとめ民話は人間性の暗い本質や現実の様相を描いていると見抜いた人もありました。カーターは、民話をもとにして創作した優れた作品と民話のアンソロジーを残しました¹⁰⁾。

(3) 現代大衆文化と「赤ずきん」

さてそれでは、赤ずきんの話は現代大衆文化にどういう展開を見せているのでしょうか。アメリカと日本で様子を比べてみます。アメリカも日本も、どちらもヨーロッパの民話を「輸入」した文化圏です。しかし、ヨーロッパ文化を母体にできているアメリカとそうでない日本とでは、だいぶ違った展開がありました。

映画『フリーウェイ』

まずアメリカですが、話題になった映画が二つあります。ひとつはマシュー・ブライツ監督、リース・ウィザースプーン、キーファー・サザーランド主演の映画『フリーウェイ』*Freeway*¹¹⁾ (邦題『連鎖犯罪・逃げられない女』) (1996) です。これは、グリムの「赤ずきん」のパロディで、暴力的な社会にあって、愛情と性的欲望が一致する無垢な処女性とは何かを問いかけつつ、主人公の少女が圧倒的な暴力に対峙し、自らも暴力で抵抗しながら、知恵を使い自力で現状を脱出しようとするストーリーです。

主人公のヴァネッサ・ルツはロサンゼルススの白人スラムに住む15歳の少女です。母親は売春婦だし、継父は無職で麻薬中毒者な上にヴァネッサに性的行為を強要しています。彼女はこの混沌とした環境の中でひとりの青年を愛しているのですが、両親がともに警察に逮捕されてしまったので、公的施設に連れて行かれそうになり力づくで脱出します。目指す先は祖母の家です。ボーイフレンドとの別れ際に護身用の短銃をもらって、それが彼女の唯一の武器になります。そして、フリーウェイ（高速道路）で車が故障し困っていると、ボブ・ウォルバートンという男性が助けてくれます。ウォルバートン (Wolverton) というのは、聞く人にはすぐに狼 wolf を意味しているとわかる名で、彼は実は連続殺人強姦犯です。

このあとは、人狼の現代版ともいえるウォルバートンからの脱出サスペンスになのですが、はじめのうちヴァネッサには全く味方がいません。グリムの「赤ずきん」物語ならば木こりの役目をして保護してくれるはずの警察も彼女を不良少女として疑うし、他にも欺瞞と暴力と性の搾取が渦巻いた敵だらけの社会で、彼女はひたすらおばあさんの家を目指します。

この映画が現代のおとぎ話になりうるのは、壮絶ながらハッピーエンド的なその結末ゆえです。ひとりだけ、彼女のことばを記憶に留めて注意を払う警察官が現れます。そのあたりから

ストーリーは「赤ずきん」のパロディへと急展開します。最後のシーンでは、ヴァネッサは赤いミニスカートをはいて、おばあさんの家へ向かいます。「おはいいい」という声に誘われて足を踏み入れると、ベッドの中には、おばあさんのナイトキャップをつけたボブ・ウォルバートンがいます。ほんとうのおばあさんは、首に縄をかけられ殺されています。銃はボブの手にありヴァネッサの運命はほとんど絶望的に見えますが、そこへ何も知らない隣人の男が入ってきます。その男をボブが撃つかすかな隙に、ヴァネッサは銃をボブの手から叩き落とし、素手の取っ組み合いになり、ヴァネッサは自分の力でボブを片付けます。警官が家に入ったときはすでに全てが終わっており、ヴァネッサは玄関先でベンチに腰掛け、流れたマスカラで汚れた顔に勝利の微笑を浮かべる、というものです。

映画『フリーウェイ』はグリム童話を下敷きにしなが、グリム童話が示している二つの価値観を拒否しています。すなわち、「女の子は無垢である」「女の子は木こり(男性社会の警察力)によって救い出される」という枠組みの否定です。その一方で、口承民話「おばあさんの話」の価値観を採用しています。すなわち、「女の子は命がけで敵から身を守ることができる」。でも、もっと深く読むと「女の子は無垢である」という価値観は、根本的には否定はされていません。「無垢」の基準が違うのです。ヴァネッサは嘘もつくし盗みもするし、人殺しさえします。その一方で、自分のボーイフレンドを心から慕い、一途に祖母の家をめざします。そういう意味では、無邪気というか、人間の衝動に対して無垢な一面を強烈に持っています。つまるところ、グリム童話の「赤ずきん」もこの映画も、現実とわたりあって生きていくとはどういう事を示しているのだと思います。

映画『赤ずきん』

もう一つの例は、キャサリン・ハードウィック監督、アマンダ・サイフリッド、ゲイリー・オールドマン主演の『赤ずきん』*Red Riding Hood* (2011) です。監督が女性だからか、タイトルにLittle「かわいい、小さい、とるに足らない」という形容詞が入っておらず、これは大事なことだと思います。こちらは人狼伝説とグリムの赤ずきん物語を組み合わせさせたダーク・ミステリーで、魔女狩りの恐怖などもモチーフに加えながら、小さなコミュニティの中でお互いが信じられなくなることの恐怖を描き出しています。

主人公のヴァレリーという少女は、幼なじみのピーターと愛し合っているのですが、母親が決めた裕福な青年であるヘンリーと婚約させられます。この状況の中で狼が村を襲い、ヴァレリーの姉が食い殺されてしまいます。そこへソロモン神父と呼ばれる人狼追跡者が彼の軍隊を率いて、まるで王が村に進軍してくるかのように入り込んできます。そのソロモン神父は、村を襲ったのは動物の狼ではなくて人狼であり、昼間は人間の顔をしてこの村に住んでいると言います。そのため人々はお互いを疑い、恐怖し始めます。

そうした中で、ヴァレリーは魔女の疑いをかけられ、捕らえられます。彼女はピーターとヘンリーの協力で救い出されるのですが、真実が見抜けなくてピーターを疑い傷つけてしまう。ついに人狼が誰だったのかが明らかになり、その人狼と戦ってヴァレリーを最後に守ったのはピーターでした。しかし彼は闘いのとき人狼に咬まれたために、人狼になる運命を背負います。このときヴァレリーは自分の気持ちをはっきりと認識し、人狼になってしまったピーターを愛

し続けます。

人狼とは、共同体の安全を脅かす恐怖の根源です。人狼のように、人間と動物の間にいる境界性の怪物を主人公が愛すという映画の結末は、先に紹介したアンジェラ・カーターの短編小説¹²⁾に基づいています。カーターの小説はとてもやさしい終わり方をしていて、少女が狼の毛むくじらの足に優しく包まれて眠る情景で閉じています。

カーターの作品も映画の『赤ずきん』も、人間中心の規範から外れたものを恐怖するという心理的な罫から自由になるには、動物と人間、弱い者と強い者、貧しい者と富める者というような社会的境界線を超えなければならないことを表現しています。このメッセージは、振り返ってみれば「鶴女房」「かえるの王子様」などの異類婚姻譚が古くから伝えてきたメッセージに他なりません。近代文明が迷信として排除してしまったそうした伝説を、現代人が取り戻したということでしょう。

マイケル・ジャクソンの「スリラー」

アメリカの赤ずきんパリエーションとしてもう一つ簡単につけ加えたとしたら、マイケル・ジャクソンの有名なビデオクリップ「スリラー」があります。これについては、拙書『魂をゆさぶる歌に出会う』¹³⁾に書いたので詳しくは扱わないことにしますが、マイケル・ジャクソンが人狼に扮して恋人を襲い、ゾンビがうようよする街に引き込んでしまうという流れです。このビデオクリップでマイケルが扮した人狼の怪物は、動物と人間のどちらでもあります。主人公はこのような人獣の超越的境界性を持っています。さらに、歴史的な大ヒット曲「スリラー」は黒人が白人主流のミュージックマーケットに押し入るといって、潜在的な白人マーケット側の恐怖を意識した境界性を背負っています。

このように、アメリカでの赤ずきんは往々にして、アイデンティティが定まらない者の苦悩や悲しみと、そのような者を擁する共同体の不安や恐怖に還元されて解釈、再創造されているように思われます。

日本のコミックス

それでは、日本のコミックスにおける赤ずきんを見てみます。日本のコミックスにおける赤ずきん像は、おおまかに分けて二種類です。暴力的でグロテスクなポルノグラフィと、可愛い少女漫画。

性的な描写が過激な部類では、玉置勉強『東京赤ずきん』¹⁴⁾があります。2003年に雑誌に掲載され、2004年に単行本の第一刷が発行されてから、増刷増刊を続けているこのポルノ漫画は、私としてはとても読み通せないような内容で、これが増刷を続けて多数の読者がいるということに恐怖を感じるくらいです。『東京赤ずきん』は、お下げ髪に赤い頭巾をかぶりまだ胸のふくらみもない少女が、自らむごたらしいセックスや血みどろの暴力被害を求めて、都会の闇の部分で立ち回るストーリーです。彼女はどんなに傷つけられても（内臓をえぐり出されても）、狼に食べられるまでは死ねない怪物という設定で、「私の夢はただ一つ・・・狼さんに食べられることですわ」と言います。

可愛い系のコミックには、彩花みんの『赤ずきんチャチャ』¹⁵⁾があります。『東京赤ずきん』は、

「赤ずきん」物語がテーマのひとつとしているセクシャリティの暴力性を特に取り上げ、過剰に醜く描いており、これに対して『赤ずきんチャチャ』は、主人公の性的リアリティをすっかり消毒し去っています。1992年に少女マンガ雑誌に掲載をはじめたのち、テレビアニメとしても人気を集め、2006年からは文庫本でも出版されています。主人公は赤い頭巾をかぶったチャチャという名の魔女見習いです。ボーイフレンドのリーヤは狼男で、状況に応じて変身でき、彼女を守ることを使命と自認している。ストーリーは、三角関係もある学園少女マンガですが、成人も含んだ一部の人々に絶大な人気があるようです。ペローやグリムは赤ずきんを無力な少女にしましたが、狼はむしろ残忍にして獣性を強調しています。ところがこの漫画では、赤ずきんも無力な少女なら狼は赤ずきんの不完全な保護者で伴侶となっています。

『東京赤ずきん』と『赤ずきんチャチャ』の二つから、日本の赤ずきんの特徴を指摘するなら、日本では赤ずきんの話に「暴力とセクシュアリティ」か「女の子と彼女に気のある男性のエピソード」のどちらかだけが読みとられているということがいえます。ですから、ヨーロッパ文化圏で伝承され現代でも変わらないいくつかのモチーフが欠落しています。それは、次の四つです。

1. 狼や人狼に対する現実的な恐怖、狼を恐怖の象徴として読むこと
2. 母親が娘を送り出し、祖母が食べられていなくなるという世代交代のテーマ
3. 危険をどう脱するか、どうしたら危険を避けられるかという教訓
4. 人間と自然の関係に関する考え方

他方、日本の赤ずきんに共通して保存されたモチーフは二つだけです。

1. 主人公は少女である
2. 少女は赤いずきんをかぶっている

さて、日本にまでたどり着いて最後に残っている赤ずきん物語のモチーフ二つは、文化とはなにかということをよく表しています。

1)「主人公は少女である」からは、お話が普遍的に、社会の中での人間に関心を持つものであることを意味します。言い換えると、物語の話者や聞き手は、社会の中で、ある特定の状況を背負わされている人間に関心があるということです。赤ずきん物語の少女は、女性としての社会的生物的役割を果たす大人になる途上の人間である、と規定できます。このモチーフは、時代が移っても変わることのない、文化発生の母体となる原始的な条件といえます。

2)「少女が赤いずきんをかぶっている」方は、文化の表層を映す装飾的なモチーフです。赤い被り物のモチーフは、口承伝承には必須ではなかったのに、17世紀の終りにペローが再話して以降は欠かせないものになりました。それはなぜかという、現代文化が18,19世紀のブルジョワ文化に重要な基礎をおいているからです。

まとめると、文化とは、社会を作ってコミュニケーションをとりながら生きる人間に「原初的な要素」と、変化する社会で生まれてきた「新たな要素」とを組み合わせているということになります。

(4) 「赤ずきん」研究史とヴァナキュラー文化研究からの視点

ヴァナキュラーな文化は、本稿で見たようにめまぐるしく生成や再生をくりかえしつつ、社会における人間の問題や普遍性を敏感に表現します。それを研究するという事は、文化のルーツや変化や意味を読みとれるようになること、現象を説明し解釈できること、「いま」の足場を人々に示すことだと、わたしは考えています。一方、これまで多数の研究者が行ってきた「赤ずきん」研究の業績を辿ると、この物語がいかに知識人の関心や思考を写し出す鏡であったかということがわかります。

「赤ずきん」は、文化人類学や心理学をはじめとして多くの学問研究分野の第一人者を魅了してきました。太陽を表す赤ずきんが夜を表す狼に飲み込まれると神話的に解釈したエドワード・B・タイラー (Edward B. Tylor, 1832-1917)¹⁶⁾、赤ずきんは五月祭の女王だとするP. サンティエーヴ (Pierre Saintyves, 1870-1935)¹⁷⁾、赤ずきんが狼に食べられるのは満月から新月への変化を説明するとしたエルンスト・ジーケ (Ernest Sieke)¹⁸⁾。エーリッヒ・フロム (Erich Fromm, 1900-1980) は、少女の赤い帽子は月経の象徴で、狼という「無慈悲で狡猾な」男性の欲望に脅かされた主人公は、結末で、狼 (男性) の腹に不妊の象徴である石を詰め彼を嘲笑したと読みました。そしてこれが、男性と女性の葛藤、両性の敵対的関係における勝負の物語だと説きます¹⁹⁾。1920年代から60年代にかけて盛んだったこのような研究では、口承の異話を検討せず、グリムの話にのみ依拠して物語を解釈していました。70年代以降は、「赤ずきん」の口承異話を示したポール・ドゥラリュの研究²⁰⁾を基礎に、さまざまな類話に目配りした優れた研究²¹⁾が続いています。近年では、フェミニズムの観点から行われた研究もあります。²²⁾

それにしても、これほどまでの知的情熱が「赤ずきん」に注がれてきたのには、なにか理由があるのではないのでしょうか。60年代までの研究の関心は、文字を使いこなさない人々の知識伝達の仕組みや洞察を民話を通して理解しようという取り組みでした。70年代以降になると、「赤ずきん」の類話展開そのものに主な関心が移ってきました。いずれにせよ、こうした研究を後押ししているのは、「赤ずきん」というヴァナキュラーな文化現象がエネルギーで、つねになにかの真理をささやいているからだと考えられます。

世紀をわたって生産されている「赤ずきん」の再話や研究業績が、一貫して注目してきたモチーフは「少女」と「暴力」です。この短い話には複数レベルの暴力が、少女ないしは女性の特性との絡みで描きこまれています²³⁾。グリムの話为例にすれば、母が娘を森 (危険) へ送り出すという間接的な暴力、狼がおばあさんと娘を食べるといった肉体的な暴力、木こりが狼を殺す、娘とおばあさんがそれに助力するという集団的で警察権力的な暴力などです。口承版には、人間と動物の境界を少女との交流によって破ろうとする潜在的な欲望や女性のイニシエーションに伴う困難が、強引な推進力 (自然に潜在する暴力) として捉えられているのが読み取れます。

研究者たちは、数多くのバリエーションを物語として繰り広げるそれらの暴力に引きつけられてきたのではないのでしょうか。そして、とくに早期の研究においては、主人公の少女が研究者自身の存在から遠い立場にあるので、自由に——コンテクストを顧みず無遠慮に——解釈を加えることができたようにも思われます。物語の享受者が作品テーマの幅の広さと柔軟性に浴し、作品が成立するコンテクストを無視して自分に引きつけて解釈をしています。このように

受け手主体の解釈や研究の可能性がひらいているのは、「赤ずきん」が優れたヴァナキュラー文学だからです。ヴァナキュラー文化は、誰のものでもないと同様に誰のものでもありえるように応用がきき、同じ関心を共有する多数の人々が手を加えたいくなる素材、あれこれと説明をつけたいくなる素材です。それは、同時代の人間存在を反映する奥の深い文化なのです。

「赤ずきん」について、口承民話の存在を考慮せずに解釈した研究者たちは、この物語を鏡に持って自分自身を語ったように見うけられます。彼らの研究の多くは民話研究としては評価できないものの、おのおの独自に興味深い主張を展開していますし、説得力もあります。多分野にわたる研究が一段落して以後、研究者や一般読者は「赤ずきん」のバリエーションの多様さに驚嘆し、解釈の可能性の広さを楽しんでいます。このように観察してくると、赤ずきん研究は、物語そのものの分析というよりは、この物語に反応した知的な人々の思索の集合であり、一群の文化現象でさえあります。赤ずきんの話を種本とする膨大な数の創作物もまた、「赤ずきん文化」の重要な一部です。研究者を語らせ、創作者にインスピレーションを与え続けている赤ずきん物語は、今後もさらに変容し、研究されていくものと思います。

注

- 1) 「口頭」という用語を使っている優れた研究に、川田順造『口頭伝承論 上・下』（平凡社ライブラリー、2001）他がある。
- 2) Robert Darnton, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*, New York: Basic Books, 1984. ロバート・ダントン『猫の大虐殺』海保真夫・鷺見洋一訳（岩波現代文庫、2007）6-7.
- 3) Theo Meder へのインタビュー（2014/10/14 Meertens Instituut, Amsterdam）。参考: Duch Folktales Database <http://www.verhalenbank.nl> (2015/12/22).
- 4) Charles Perrault, *Little Red Riding Hood* (1697). Cited in: Jack Zipes, ed., *The Trials and Tribulations of Little Red Riding Hood*, 2nd ed. (New York: Routledge, 1993) 91-93. ジャック・ザイプス編『増補 赤頭巾ちゃんは森を抜けて——社会文化学から見た異話の変遷』廉岡糸子、横川寿美子、吉田純子訳（阿吽社、1997）
- 5) Charles Perrault, "Petit Chaperon rouge," *Histoires ou Contes du temps passé*, [https://fr.wikisource.org/wiki/Histoires_ou_Contes_du_temps_pass%C3%A9_\(1697\)/Petit_Chaperon_rouge](https://fr.wikisource.org/wiki/Histoires_ou_Contes_du_temps_pass%C3%A9_(1697)/Petit_Chaperon_rouge) (2015/12/31).
- 6) Jacob and Wilhelm Grimm, *Little Red Cap* (1812). Zipes, 135-38.
- 7) Brüder Grimm, "Rothkäppchen," *Kinder- und Hausmärchen*. [https://de.wikisource.org/wiki/Rothk%C3%A4ppchen_\(1812\)](https://de.wikisource.org/wiki/Rothk%C3%A4ppchen_(1812)) (2015/12/31).
- 8) 『グリム童話 上』池内紀訳（ちくま文庫、2012）209-210.
- 9) Paul Delarue, "Les Contes Merveilleux de Perrault et la tradition populaire" (*Bulletin folklorique d'Ile-de-France*, 1951) 221. 和訳は筆者による。Paul Delarue, trans. Austin E. Fife, *The Borzoi Book of French Folk Tales* (New York: Alfred A Knopf, 1956) 230-32 を参照した。ザイプスによれば、この話は1885年ころ、フランスのNièvreで記録されたという（Zipes, 21）。
- 10) Angela Carter, ed., *Angela Carter's Book of Fairy Tales* (1990. 1992. London: Virago, 2005).
- 11) *Freeway*, directed by Matthew Bright, Actors: Reece Witherspoon and Kiefer Sutherland (1996).
- 12) Carter, "The Company of Wolves," *The Bloody Chamber* (1979. Penguin Books, 1993) 110-18.
- 13) ウェルズ恵子『魂をゆさぶる歌に出会う：アメリカ黒人文化のルーツへ』（岩波ジュニア新書、2014）
- 14) 玉置勉強『東京赤ずきん』第一巻（幻冬舎、2004）

- 15) 彩花みん『赤ずきんチャチャ』第一巻（集英社、2006）
- 16) Edward B. Tylor, *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization* (Chicago: U of Chicago P, 1964).
- 17) P. Saintyves, "Little Red Riding Hood or The Little May Queen" *Les Contes de Perrault* (Paris: Emile Nourry, 1923) 211-229. Dundes, 71-88.
- 18) Ernest Sieke, *Indogermanische Mythologie* (Leipzig: P. Reclam) 1921. Alan Dundes, ed., *Little Red Riding Hood: A Casebook* (Madison, Wis.: 1989) 206. アラン・ダンダス, 池上嘉彦, 山崎和恕, 三宮郁子訳『「赤ずきん」の秘密——民俗学的アプローチ』（紀伊国屋書店, 1994）
- 19) エーリッヒ・フロム『忘れられた言語——夢の精神分析（改定新版）』外林大作訳（東京創元社, 1971）
- 20) Delarue, "Les Contes Merveilleux de Perrault et la tradition populaire."（注7）
- 21) Zipes, ed., *The Trials and Tribulations of Little Red Riding Hood*（注4）, Dundes, ed., *Little Red Riding Hood: A Casebook*（注16）, Darnton, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*.（注2）など。
- 22) Catherine Orenstein, *Little Red Riding Hood Uncloaked: Sex, Morality, and the Evolution of a Fairy Tale* (Basic Books, 2002) など。
- 23) ここでは英語のバイオレンス, すなわち生命の安全を妨害し物理的な力を乱暴に行使することを第一義的に暴力とした。加えて, 物理的な力を用いずに生命の安全を妨害する力も暴力として考えた。